

---

# 完全なる勝利と永遠の不幸

ヘタレ + ドヘタレ = 超ヘタレ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

完全なる勝利と永遠の不幸

### 【Nコード】

N4624Z

### 【作者名】

ヘタレ+ドヘタレ=超ヘタレ

### 【あらすじ】

黒衣の怪物がもたらすのは沈黙。  
クリスマスの日に親友を失った男が歩む物語。  
彼の勝利は血も流さない、人が死ぬことも無い。  
だが、時として残酷な不幸をもたらす。  
そんな怪物の物語。

## プロローグ（前書き）

プロローグだもんね、語っちゃっていいもんねえ。

俺のは大体ノリの勢いで書かれる作品が多いからね。  
過度な期待はしないでね。

クリスマスは中止。

## プロローグ

共に語り合う仲間がいたから笑顔でいられた。

共に笑える友達がいたから生きていく希望があった。

友達が消えた時から彼はおかしくなった。

彼はしゃべること無く、抜け殻となり、すべてに対して無関心となった。

きっと、虚空となった彼の頭の中で思い出が浮かんでいるだろう。

親友との思い出だけを……。

黒衣の怪物が司るのは沈黙。

彼の怒りは敵の血を流さない。

もたらすのは永遠の沈黙。

そんな怪物が愛するのは静寂と傍にいる親友だけ。

# 1 『沈黙を強いる者』

肌寒くなつたせいだろうか。

通っている大学へと歩いていく男がくしゃみをしている姿が目に見えた。

孤独なその姿を見ていた周囲は何も声をかけることなく見ているばかり。

声をかけたところで彼がまともな反応をしてくれるとは思っていなかったからだ。

たつた一人だけ違った。

「日影さん！」

温もりのある缶コーヒーを手に真塩が近づいてくる。

自分の名前を呼ばれても日影彰ひかげあきと人は何も反応を示さず、呆然と歩いていた。

心ここに在らず……。そんな言葉で例えることができる様子でもある。

「日影さん、寒くなつたよ。コーヒーでも飲む？」

「……」

「もう少しで冬だから朝寒いよね。海外研修に向けて新しい服買わないとね」

「……」

笑顔で対応する真塩ましお 奈緒美なおみの言葉に彼が答えることは無かった。

一人大学に向けて早足になっていくだけ。

取り残されたと感じた真塩が不意に歩いていた足が止まる。

さびしげな表情で日影の背中を見ては立ち尽くしているだけであつた。

日影が向かつたのは大学内にある研究所。

その研究所の入り口近くで彼は立ち止まった。

ドアの横には『横峰研究所』と人の苗字がわかるように記されている。

『001 コードネーム 日影彰人 確認』

扉の上にあるスピーカーからそう聞こえてきた。

アナウンスが終わったと途端に自動ドアが開く。

ドアの向こうへと1歩歩こうとした時、日影の姿が音も無く変わっていった。

元の小柄な青年の姿では無い怪物へと変形する。

見えてきたのは肩から腕にかけて漆黒の甲殻。

その甲殻は体全体まで広がり、強靭さが露にされていた。

首元からは灰色の肌が見え、口からは異形な仮面が纏われている。彼が1歩1歩、踏みしめる度に彼を映し出すものがすべて割れていた。つた。

部屋にあつた鏡に微かに写した窓ガラス、細かいものではテレビの画面ですら彼の姿を写した途端、一人で割れた。

「今日も不機嫌だなあ、彰人君」

部屋の椅子に座っていた男 横峰が笑いながらそう言う。

割れた鏡やテレビの破片を素手で掴みながら予め用意されていた袋へと投げ込んでいった。

「また酷い夢をみたかね」

男がいくら聞いても彰人は答えない。

笑うことすらしなかった。

1年前のクリスマスに起きた事件から彼はずっとそのまま。

あの時から心が動いていないことが男にはよくわかった。

その日はホワイト・クリスマスだった。

家族と過ごす者、恋人と過ごす者等様々ではあるが、その日の彰人は高校の頃からの親友達と過ごすことになっていた

どこか安っぽい食べ放題の店でくだらない話を肴に一晩楽しむ。

そうなるはずだった。

「利久！ 正人！」

クリスマス夜の夜、彰人の目の前で行われたのは残酷なリンチだった。そのリンチで親友二人が死んだ。

一人、彰人は無残な姿だが生き残れた。

腕を折られ、体の半分は炎で焼かれた状態で一般の市民によって見つかった。

誰がやったのか犯人達が見つからず、唯一の目撃者である彰人はショックで記憶も消え、しゃべることも出来なくなった。

唯一の手がかりは彰人の手にあつたキーホルダーだけだった。

「終わりだ。お疲れ、彰人君」

検査は無事に終わった。

いつものことでトラブルなど何も無いが、少しでも変化があるのかないかと横峰はデータを見比べていた。

彼が毎朝検査を受けるのは勿論、怪物となることが出来るから。

それだけでは無い。

彼に宿った能力を日本という国が研究するため。

その中央に彰人が通っている大学『椿文化大学』があり、高校卒業と同時に彼はそこを通うようになった。

どんな能力なのかはいまだ説明されていない。

発火するわけでも光線を出すわけでも無い。

目に見えない力が彼にはあつた。

彰人自身がまだ喋れる頃、なぜその怪物の力を得たのかわからないと本人も語っていた。

生まれついでの方だ。

役立てようという考えも無く、力を押さえ込みながら今まで生活してきたという。

特に使い道が無いというのもあつた。

大学に招き入れてから2年間。  
彼も20近くになるうとしていた。  
だが、能力や外見に変化は無かった。  
最初の1年間は話すことも出来るから状態を聞くことが出来た。  
クリスマス悲劇から研究も一時、中断した。  
彼の心境を考えてだったが、国からの要請がうるさいために研究は  
続行することに……。

検査が終わった後、彰人は講義に出ようと廊下を歩いていた。

目的の地についたと途端、聞こえてきたのは怒鳴り声と椅子や机が  
動いている音。

そんな音を気にすることなく、彼はドアを開いた。  
生徒同士が争っていた。

そんな中で彰人が入ったと途端にすべてが静まり変える。

殴り合ってた学生二人が時間が止まったかのように硬直し、周囲に  
いた生徒達は彰人を見た途端に後ずさりする。

彼が入ってきただけで講義室の中が急激に変化した。

「おお、日影さん、ちーす」

学生らの中からひよっこり顔を出してきたのは朝話しかけてきた奈  
緒美。

朝と変わらない様子で彰人は無視をして空いている席へと歩いてい  
った。

一瞬にして静まり返った教室内で生徒達も何事も無かったかのよう  
に席へと戻っていく。

喧嘩をしていた学生は互いに平謝りで事を静めた。

一瞬で教室を沈黙させた彰人は何もしていないと言う雰囲気漂わ  
せながらテキストを開いていた。

昼休みの時間、一人寂しく過ごす彼がいた。

誰とも話すことなく、悲しい色をした目が遠くを見る。



彼が今何を考えているのか、どんな時間を過ごしているのか。  
周囲に誰もが疑問を抱くがどんなに時間がたっても答えが出ること  
が無かった。

1 『沈黙を強いる者』（後書き）

書いてて思ったんだ。

ただのぼっちじゃねえか

## 2 『思い出は自宅に、願いは海に向い』

「金溜まったら、海外いきてえな」

「酒のみてえなあ。フランスの酒って美味そうだ」

友人二人が夜な夜なそう呟いていた。

とくにやる事が無いと彰人も含んだ3人は理想ばかりを語るようになる。

フランスの旅行も一つの理想。

「行きたいな」

彰人も不意に呟いてしまった。

そして利久がパソコンを立ち上げては早速インターネットを開いた。旅行サイトを探しては目的のページを探していく

「いい旅行プランがあるで。しかも安い。行こうか、来年の春にでもさ」

「彰人の金が無いだろ。どうするんだよ、彰人」

正人の不安に対して彰人は笑っては「大丈夫」だと言う。

「科学者や国から金せびればいくらでもいけるさ。研究目的って言えばいくらでも援助してくれる」

「罰当たりじゃねえか。まあ、当然だろうな」

「研究室で馬鹿みたいに怪物、怪物と言われて……彰人は辛くないのか」

ずっと研究の対象として友人の体がいじられていくことが耐えられなかった。

高校の頃からの親友が怪物のように扱われ、世間からも嫌悪され続けてきて、助けられないことが辛かった。

正人も利久も小さくため息をついてしまった。

「今日は俺が飯だったな。任せろよ」

ルームシェアの一人として役割を果たそうと彰人は立ち上がった。

フランス旅行の計画を練ろうとしている利久達のために彼が考えて

いたのは赤ワインを使った肉料理だった。

この日も彼は赤ワインを使った肉料理を作っていた。無表情、無言で手際よく調理をしていく。

お皿も3人分。

彼が誰のためにつくっているのか。

テーブルに座っている横峰と奈緒美はわかっていた。

目の前に出された香ばしい香りを漂わせている肉料理はきっと、今は亡き友人のために作られているのだと……。

過去に魂を残した彼はこうやって毎日、同じ繰り返しをしていた。

親友の亡き後、住みかとして使っていた家は彰人一人で住むことになった。

遺品はすべて家族の元に戻され、残ったのは彰人一人だけ。

時々、奈緒美と横峰が様子を見にきている。

すでに仕事をしていた二人の苦労話を聞くことが出来なくなり、また二人とゲームをしたり、くだらない話で笑いあうことが出来なくなり、彰人の心を消えかけているのがわかった。

「先生……どうすりゃいいんですか」

「知るか。とりあえず、今度の海外旅行で何か変わるかも。まあ、楽しみにしとけばいいや」

「……日影さん」

奈緒美が見た先には彰人が赤ワインをボトルで飲んでいる光景があった。

未成年の飲酒ではあるが、彼女は止めることなく見守る。

どんなに酒を飲んでもどんなに体に悪い影響が無い。

彰人の特異な体質を知っていたために止めることはしなかった。

今日、奈緒美と横峰が来たのは二日後に控えた海外研修に向けての準備のため。

彰人の念願であるフランスへの訪問の準備を手伝うために来ている声をかければ自分で支度することが出来るが、不安があるために彼の家に訪れていた。

ここを離れて急激に変化が変わればどうなるか。

認知症では無い。言葉をかけて頼めば理解して行動をしてくれる。

今回の大規模な計画『旅行に行く』ということ伝えてらどうなるか。

パニックにならないか不安になってしまった。

奈緒美がそう不安を抱いている中……。

「彰人君、フランス旅行に行こうか」

「ちよ、おーい！」

奈緒美の不安をよそに横峰はためらうことなく彰人に言った。

「親友との夢、叶えたいだろ？いつも国から怪物扱いされてるあんたに俺からのプレゼントだ」

「……」

彰人は目を輝かせている。

いつも死んだ目をしている彼が途端にフランスの話をしたら心を無くす前の目に戻っていた。

今回のフランス旅行は国からの慈悲でも横峰の善意でも無い。

ただの研修旅行のようなものだった。

勿論、学校の行事の一つである。

彰人がフランス旅行の行事を忘れていただけ……。

横峰の分析を聞いて奈緒美もやっと納得した。

「昔のことを思い出してフラッシュバックが起きるか不安がありました」

「奈緒美ちゃんがそう思うのも無理ない。俺は生物学の研究しかしてないから、正直自身無かったよ」

「でも、よく日影さんを口説けましたね」

「口説くって……他に言い方無いのか。まあ、そうだな」

彰人が出してくれたコーヒーを一口。

そして、横峰は続けた。

「臭いことを言えば、思い出ばかりに引きこもってるのも心に良く無いと思って……。ただ手を差し伸べただけだよ」

「消臭剤ぶつかるほどの臭さじゃなくて安心しました」

「……そりゃ、良かった」

消臭剤を持ってきた奈緒美を見て、横峰は少し安心した表情を浮かべた。

かっこいいことを言えば、ラベンダーが体にこびりついていたのだろう。

苦笑いで彼はまたコーヒーのカップを口元に持ってくる。

「臭くないのも悪く無い」

フランスのホテルでは近く来訪する日本の学生のために準備が行われていた。

料理から部屋の掃除まで丁寧に行っていく。

外で作業していた作業員がふと、空を見た。

「雪？」

夜空から降りだしたのは白い雪。

天気予報では降り出すと言った話は無かった。

不思議だなと感じた作業員はずっと夜空を仰ぎ見ていた。

2 『思い出は自覚し、願いは海に向いし』 (後書き)

書いてて思った

俺、臭いわ

### 3 『沈黙の世界』

研修先であるフランスについた。

航空機内で長い時間、過ごしていたためか彰人の表情に疲れが溜ま  
っているようにも見える

「ほらよ」。

横峰が感づいたか彼にこっそり渡したのは栄養ドリンク。

彰人は礼を言うことなく、受け取った。

彼がふたを開けて飲む寸前に一瞬、横峰をチラッと見る様子があっ  
た。

「……」

「ん？」

ただ、数秒見ただけ。

見た後は栄養ドリンクを一气飲みした。

「なんて言いたかったんだろうな。こいつ」

「横峰先生、日影さん。行きますよ」

奈緒美が二人の肩を軽く叩き、学生らが集まっている方へと走って  
いく。

横峰が「行こうか」と声を掛けては彼女の後について行った。

「……」

残された彰人が不意に空を見ては目を見開いた。

少しずつ、少しずつ降り注ぐ粉雪。

不思議そうな表情で曇った空を見上げた。

古い時代の名残が未だ残り、粉雪がその都市を白銀の世界に染め上  
げていく。

フランスに来てから楽しみが増えてきたと今まで無表情だった彼が  
静かに微笑んだ。

明るい表情をしたもの、彼の笑みを見る者は誰もいない。

置いてかれまいと彰人が慌てて学生らの元へと走り出した。



フランスに来たのは2学年の生徒全員。学部も大学には二つある。それぞれが目的の研修施設先へと向かう中、横峰と彰人はその二学部とは別の場所へと移動した。

ホテルの前、外見も立派なその建物へと二人は足を踏み入れる。その場にふさわしくない外見の二人をホテルの係員や警備員は止めない。

それどころか歓迎した様子で二人を迎え入れた。

「ども」

横峰が愛想良く笑顔を振りまく。

その後ろに彰人が無表情でついて行った。

その先に何かがあるのか、何も知らされていない彰人にとって不安しか感じられない。

強張った表情でついていくしか無かった。

たどり着いた先には大きなホール。

その中では威厳のある顔ぶれの要人が椅子に座して待っていた。

フランスの大統領から各国の有名な要人や科学者。

彼らの厳しい視線が彰人へと向けられた。

「お待たせしました。日本語でいいですか？私、慣れないものなんです」

横峰の言葉にフランスの大統領は「構わない」と許した。

外国の人間が日本語しゃべったことで彰人が目を見開いて驚いた。

「彰人君、よろしく頼む。初めての会合で緊張するだろう」

「……」

「どうした？日本語を喋るフランス人が不思議か。君のために練習してきたんだよ」

外国の言語をスラスラと喋る大統領。

彼を不思議そうに見ているばかり。

しばらくして他の人物を見る。

知っている限りどれも有名な人物。  
彼らの前で自分が何をするのか。  
彰人は不安な表情で警戒をし始める。

この高級ホテルに要人が集まっている。

ホテル内の仲間の報告を聞いた時、ただことじゃないと彼らは静かに動き出した。

聞きなれぬ言語で仲間達が連絡を取り合う。

襲撃のタイミング、武器の調整。

どれも全て完璧だ。

「そろそろ行こうか」

手下達へとそう言葉を掛けた。

「あいつらを捕らえたら身代金いけるだろうよ」

男が弾をこめて、手榴弾を弄びながらホテルへと向かっていく。

入り口に止めた大型トラックから男達が出てくる。

重火器を手にした強靱な肉体を持つ男達が雪の降る日中の街中を走っていく。

市民を無視し、要人達の集まるホテル内へと襲撃。

その勢いを誰も止めることが出来なかった。

ホテルの係員達へと銃弾の嵐を放ち、コンバットナイフの鋭い刃が止めに入った警備員達の首を掻っ切る。

さつきまで優雅な威厳を誇っていたホテルが血塗られていった。

見るに耐えない悲惨な光景。

その光景の中、男達が目的の場所へ向かうため死体を飛び越え、血溜りを音を鳴らし踏んでいく。

「……………」

最初に異変に気付いたのは彰人だった。

遠いところから聞こえる銃声。

その銃声がだんだん大きくなる。

「おいおい、敵か」

「門前の馬鹿どもが、役に立たない！」

ホテルを守り、散っていった部下達を非難した要人達。彼らへと彰人は怒りの表情を向けた。

要人達のために犠牲になつた人達を哀れんだ。

ドアが荒々しく開けられた。

同時に入ってきたのは重火器を手にした男達。

今ではテロリストと呼ぶべきだろう男達は銃口を要人達に向けた。

前線を出た男が不審に思ったのは要人とテロリスト達の間に行った一人の男。

怒りに満ちた目を向けてきている一人の男だった。

要人達の集会にふさわしくない小柄な男。

テロリストの前線の一人が面白いと銃口の先を変えた。

「バアイ、グッドボーイ」

引き金を引こうとする。

その瞬間、起きたのは……。

現実だと疑問を抱くほど奇妙な光景だった。

「……なに」

銃弾で風穴を開けてやると笑った前線のテロリストの目に入ったのは奇怪な怪物。

強靭さが露わにされた黒い甲殻と肉体。

仮面をかぶっているが、口元は晒されその口元では唇をかみ締め、血がにじんでいた。

「化け物……」

殺されるかもしれない。

怒っている悟つた瞬間、前線で彰人に銃口を向けた男が迷うことなく引き金を引く。

だが、空うちとなった。

「……はあ？」

「うてねえ」

銃弾を撃てなくなったことでテロリスト達が動揺する。恐ろしく異形な怪物の登場と武器の弾詰まりで困惑している中、一人のテロリストが手榴弾のピンを引いた。いくら怪物相手でも手榴弾の爆発では木っ端微塵になるはずと投げたが。

彰人の足元まで転がり、数秒立つても爆発しなかった。期待した手榴弾も効果を発揮しなくなった。

「何だよ！これ！」

「ナイフだ。切り刻めばいい」

兵士達を引き連れたリーダー格の男の指示でテロリスト達の持ち武器がコンバットナイフへと変わった。

皆が皆、彰人に向かって襲い掛かってきた。

敵達がナイフを持ち、攻撃を仕掛けてきても彰人は動じない。

動くことも無く、ただ立ち尽くしていた。

彼自身驚いていたというべきだろう。

飛び掛ってきた男は皆、意識を失い床の上へ伏せていった。

ナイフが手から落ち、皆崩れ落ちていく。

最終的には誰一人立ち上がるうとする者がいなかった。

「……」

「お、おいおい……なんだよ、それ」

静まり返ったホールの中、最初に喋りだしたのは横峰。

彼の方へと向いた怪物の状態の彰人。

また彼は驚きの表情を浮かべた。

要人達が椅子から落ちては倒れている。

自分がしたことなのかと、彰人の表情が不安の色に染まっていく。

その目は何があったのか教えてほしいと答えを望んでいるようにも横峰の目には写っていた。

テロリスト達が全員、沈黙した。

そして重火器や爆弾ですら何も音を立てることなく不発に終わった。襲撃されたホテルが1度騒がしかったのが一瞬で静まり返り、そこに広がったのはただ、静かな世界だった。

### 3 『沈黙の世界』（後書き）

ここ最近、おもしろいゲームが無い・・・  
ダークソウル買っ直そうかな

#### 4 『白金の牙』

要人もテロリストの無事だった。

病院に運ばれた時は意識不明で全身が麻痺してただけで命に別状は無かった。

彰人を咎める者は誰一人いない  
そして褒める者も誰一人いなかった。

彰人からしたらどうでもいい出来事だったのか。

帰ってきた途端、学生らの泊まるホテル内のロビーで赤ワインを仰いでいた。

研修を終えた学生達は遠くから彼を見ていては、人数確認、荷物の整理をしている。

もちろん、彼ら学生らの耳にもテロのことは既に入っていた。

それを沈めたのも彰人だと言うことも……。

英雄視するかどうか、また悪魔と見なすかどうか悩んでいる最中だった。

「すげーとか言うレベルじゃないよ！ぱねーす！まじ、ぱねーす！」  
一人彰人の周りではしゃいでいるのは奈緒美。

いつものことだと彰人は無視するばかり……。

今夜の彼はいつも以上に酒を仰いでいた。

科学者の目からした驚き以外の何者でも無い。

生まれて初めて彰人の能力を目にしたのだ。

興奮してしますのも当然だった。

眠っているテロリストから取り出された血液を元に彰人の能力と関わりがあるか無いかを調べていく。

能力から察するに目に見えない気体か何かで沈黙する未知のウィルスを用意したのだろうと予想していた。

「まじかよ……。残っちゃいねえ」

その仮説はすぐに否定される。

血液には何も残っていなかった。

特殊なウイルスはおるか、人間のDNA組織まで壊れていない。

そこでまた一つ仮説が立った。

「もしかしたら脳か」

さらに研究にたいする意欲が沸くばかり。

ホテルとは別施設の研究所で機材のコンピューターに目を通し続けた。

細かい反応を見落とすことが無いように……。

赤ワインのビンを逆さにして振る。

酒瓶の中身が底を尽きたと彰人が珍しく残念そうな表情をした。

好き好んで飲んでいた赤ワインがどこかに無いか。

今の彼はそんな顔をしていた。

「どうぞ」

気前良さそうに酒瓶を差し出したのは一人の学生。

笑顔のまぶしい2枚目の男。

男の金髪が電灯の光で反射しているのが見えた。

「……」

「覚えてるか？俺のこと。去年の夏頃に世話になったな」

「……」

「俺だよ、俺……。稲葉 優。俺がバイク事故した時、助けてくれ

たじゃねえか。覚えてねえか？」

「覚えてないよ。彼は……」

優の肩を叩いては奈緒美が悲しく声掛ける。

「友達を亡くしてからずっとあの状態だし。声掛けて少し反応する

だけ。わかる？」

「あ……。そうか。そうだったな」

優はそれ以上何も言わなかった。



ショックをまだ引きずった彼に慰める言葉も無く、無言で酒瓶をテーブルの上に置いた。

「……………」  
酒瓶をしばらく見つめてから、何を思ったのか彰人が立ち上がった。酒から視線が変わる。

その先には雪降る景色。

ふと、その景色に向かって彼が歩き出した。

他の学生達も気になっていた。

雪が降るような季節では無いのに真冬のごとく極寒の地に変わったフランスの都市で異常気象。

何か不吉なことが起きているのでは無いだろうかと不安を抱き始める。

彰人もその一人だった。

ドアを開けて真冬の外に出てみれば、雪が降っているはずなのに月が出ていた。

雲ひとつ無い夜空から白い雪が降るといふ現象は時として人を魅了する芸術にも見えた。

「……………」  
その芸術へと彰人は睨み付ける。

向かい側のビルの屋上に立っている怪物を見た途端、彼は警戒した。

「どうしたの？」

彼の元に来た奈緒美が不思議そうに聞いた。  
睨んでいる先を奈緒美も目で追う。

ビルの上にはいた金色のたてがみは目立ち、白銀の翼は月の光を反射している。

「何あれ……………」

今ドアから出た男がテロリストを沈黙させた人間だというのが一

目でわかった。

黒い瞳が鋭く睨みつけている。

今にも殺しに来るかもしれないその目は見ているだけで震えてしま  
うほど。

「……二ヒト」

金色のたてがみを揺らして、白銀の翼を羽ばたかせた。

獣が向かうところは決まった。

正義か悪かわからない『沈黙』をもたらす怪物の居場所。  
標的を捉えた獣はビルから飛び立った。

危険を察知した彰人が最初に起こした行動は奈緒美を突き飛ばす  
こと。

もし、そうしなければ奈緒美が真つ二つになるからだった。

獣の爪はホテルのドアを切り裂いた。

標的とされた彰人は強靱な黒い甲殻で身を守った。

手の平を盾に金色の獅子の爪を受け止めた後は、薙ぎ払う。

仮面の下から見える彼の目は警戒から怒りへと変わった。

すぐさま放たれたのは黒い一閃。

彰人が黒い爪で敵を横切りする。

切り刻まれまいと獣はすぐに後ろへ跳び下がった。

「あちゃあ……」

獣が自分の首をさすった。

手についた金色の液体 自分の血を見ては残念な表情でため息をつ  
く。

「冗談じゃない。少し手加減しなさいよ」

「……」

無言で黒い腕を武器に彰人が怪物へと走り出す。

繰り出される彰人の連撃。

仮面の下から見える漆黒の目は殺意に満ちていた。

「わお、ストオオオオプ！」

黒い爪が顔面を切り刻んでくる寸前に獣が受け止めた。

「ここで私を殺したら、日本とフランスの国際問題になるわよ！」  
「……」

獣の一言は彰人の攻撃を止める。

彼自身も自分が何をしようとしているのか気付いたか、おとなしく手を引いた。

しばらくは雪の上で倒れ込んだ獣の姿を見下ろす。

今までの殺意に満ちた目は無くなり、前までのおとなしい目つきに変わっていた。

「……」

「彰人さん！大丈夫ですか？」

戦いが収まったところで奈緒美が駆けつけた。

それと同時に獣が「すみません、ほんますんません」と立っては頭を下げた。

「ちょっと出来心でやつちやいました。ほんま、申し訳ないです」  
獣がしゃべったことで奈緒美が驚き、しばらく沈黙した。

やっと話し出したのは黙ってから5秒後のこと。

「はあ……」

「ごめん、この姿じゃあ驚きますね。失敬、失敬。ちよいと待ってね」

そう言うと獣は体を発光させた。

何が起こったのかと、奈緒美も怪物のままの彰人も光を凝視。

しばらくして光から現れたのは、見慣れた人物。

会うのは初めてで会っても、テレビや新聞でもよく見る女性がそこにいた。

長い茶髪は綺麗な艶があり、風で髪が揺れる度に櫛で梳いても引つかからないほど綺麗に見える。

薄い青い瞳は彰人達をしっかりと捉えている。

「フランス首相の娘さん……」

奈緒美の言葉に獣だったフランス人の女性は笑って頷いた。

獣のような姿が容姿端麗な女性の姿に変わったことで彰人は口を開いたまま驚きを隠せずにいた。

「……………」

「騒がせて……………」ごめんちゃい!」「、

#### 4 『白金の牙』（後書き）

赤ワインの美味さは異常  
やばい、まじうめえ。

クリスマス、なにをしようか……。  
一人……辛い……。

## 5 『名前の無い怪物達』

彰人のような怪物はこの世界で何人かいる。

何人どころじゃないのかもしれない。

何十人も何百人もいる。

一人で生きている者。

集団で生きる者もいる。

ただ彼らに共通しているのは姿が異形であること。

誰一人怪物となれば回りが逃げるほど醜いものである。

いまだ研究している科学者らの間では名前がつけられていなかった。名前次第では人権侵害と騒がれるのだ。

人であるかどうかは定かではないが……。

フランスの首相の娘がホテルのロビーに座っている。

その事実を周囲にいる学生を沈黙させた。

「何、黙り込んでいる」

「貴方の日本語の上手さに言葉が出ていないんですよ」

苦笑いで優が言った。

「なんでフランスの人が日本語ペラペラなのか。俺らでさえフランス語や英語なんて満足に……」

「日本語など嗜む程度だ。趣味で勉強してきたからな」

「そりゃ、納得しました。どうぞ」

ホテルのスタッフに淹れさせたコーヒートを首相の娘の前へ差し出した。

彼女が手に取ろうとした時、何か忘れていたのか「そうだ」と学生達の方を見る。

「名前言ってなかったな。アネット・アペール。よろしく」

「よろしくお願ひします。優です。それで貴方がさつき襲ったこの

二人……」

「奈緒美です。彼は彰人さんです」

替わって名乗ってくれた奈緒美へと彰人は手を上げて礼をした。話すことが出来なくなつた今、彼の言葉を誰かがほとんど代弁しているんだとアネットは把握したか……。

「その男が話す時はスマートフォンか何か電子機器で代弁のアプリを使った方が良いみたいだな」

そう笑つては言う。

「なぜ、話さない？自分の口で……」

アネットの質問に彼は答え無かつた。

表情が今より暗くなり、しまいにはため息をつくようになる。

そして奈緒美も優も沈んだ表情を見せた。

その姿からただならぬものがあるとアネットは感じ取つた。

「いけないことを聞いたか」

フランス首相の娘がホテルに入っていくのが見えた。

ホテルは日本の学生達が泊まっているはずだ。

黒いロングコートに身を包んだ男が路地裏から様子を伺っていた。手にある携帯電話の画面には人物画像が出ている。

フランス首相の娘ともう一人少年の顔写真。

今、ホテルの中に入った怪物二人の写真だった。

「友達二人が殺されたのか」

遠くで赤ワインを飲んでいる彰人を他所に奈緒美と優が話をした。

哀れむようなアネットの目はすぐに彰人へと向けられた。

「その力故か？」

「相手側の目的はわかつてないです。犯人の顔だつてわからないですから」

「今は犯人を捜しているのか」

アネットの問いに奈緒美は首を横に振つた。

手がかりはたった一つ、変わったキーホルダーのみ。

そのキーホルダーは彰人の手元にあった。

「彰人さん、それ見せてください」

奈緒美が言くと、彰人は遠くからキーホルダーを投げた。

手に取ったのは奈緒美と彰人の間に入ってきたアネット。

突然、前に出てきた彼女の動きに奈緒美が半ば驚いた。

「…………え？」

「ごめんね。驚いた？」

「はあ…………。いや、大丈夫です」

彼女の陽気な謝りを奈緒美は笑っては許す。

彰人とは違う異質な力は奈緒美だけじゃない、他の人間達を驚愕させた。

彰人の存在は他人の脳にある神経を刺激し、彼自身が危険であることを認識させる。

以前に横峰が彼の潜在能力を解明した。

彰人自身が意識しなくても自然とその能力は発生しているために、彼に近づく人物は奈緒美、横峰や他の数人以外皆、好き好んで近づくこととしなかった。

今の奈緒美でも話しかけるのに一ヶ月はかかった。

彼に近づく者としたら長年付き添い、好意を抱いている者。

言うなれば、当時まだ生きていた彰人の親友である利久と正人ぐらいだろう。

人間以上の感覚を持っているアネットも彰人で言う人を遠ざける能力と同じ潜在能力だと奈緒美はすぐにわかった。

「彰人君が持っていたこのキーホルダー。妙なにおいがする」

キーホルダーを見ていたアネット。

誰よりも早く、彼女の言葉に反応したのは彰人だった。

「…………」



「何のにおいかな。椿の匂いがする。日本の花だな」

「あ……あ……」

「彰人さん？」

「おい、彰人が……」

何か言葉を発そうとしているのか、しゃべれないのに必死に話しかけようとする彼の行動に奈緒美も優が驚いた表情で見た。

「すげえ、話そうとしてる」

「彰人君だったかな。悪いが、椿の匂い以外は何もわからない。鋭い五感が役に立って良かった」

「……」

椿の匂い以外の手がかりが掴めなかったことに彰人の表情がまたさつきと同じように沈み込んだ。

アネットからキーホルダーを受け取った彰人がトボトボと背中を向けては去っていった。

「彰人君のあの背中を見てて切なくなるな」

不意にアネットの口から出たのは聞いていて周囲も切なくなるような言葉だった。

「彰人さん」

「……」

奈緒美達が見ている中、彰人はロビーのソファでまた赤ワインに手を出す。

いくら飲んでも、いくら酔っても（酔うことは無いが）彼の悲しい雰囲気が消えることは無かった。

喜劇とは突然やってくる。

彰人にやられたテロリスト達のような襲撃は稀だがやってくることがある。

今、ガラスを割って吹雪を起こしてきた白い怪物もその類だろう。

突然、ガラスの割れる音で学生皆が入り口の方を見ては怪物の姿を確認した。

「逃げる！」

すぐに変身したアネットが叫び、生徒達の前に躍り出る。牙を光らせては、すぐに標的を捕らえた。

「……」

白い二本角の怪物はホテルの中へと侵入してはぎらついた赤い瞳をアネットに向ける。

怪物自身も標的が決まったのか。

「来いよ。フランス首相の娘さん。かわいがってやるよ」  
アネットを相手に日本語で挑発してくる。

日本人だとすぐにわかった。

「まさか……」

「……」

ロビーの中で強い吹雪が舞う。

その中で彰人が立っていた。

襲撃してきた敵を睨みつけたまま、その体勢を崩さない。

「……」

「おいおい、あの表情……絶対、機嫌悪いぞ」

奈緒美の肩をゆすっては他の学生がそう告げた。

「やばい。彼が……」

もし暴走したらどうなるか、想像できなかった。

奈緒美が叫んだ。

「彰人さん！」

名前を呼んだ時にはすでに遅かった。

黒い甲殻とローブの姿に変わった彰人が奈緒美の叫びで止まらない。

黒い爪を露にして一歩一歩、ゆっくりと歩き始めた。

仮面の下から見える黒い目。

写っていたのは彼を苛立たせた白い怪物だった。

5 『名前の無い怪物達』 (後書き)

ハッピーメリクルシメエ！コノリアヂユウドモオオオオオ！

もう、幸せになっちまいなよ。

愛してるぜ、みんな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4624z/>

---

完全なる勝利と永遠の不幸

2011年12月24日01時54分発行